世羅博昭著

『源氏物語』学習指導の探究

「源氏物語」といえば、やはり高等学校における古典学習の中で、最後にして最高の難関であろうと思われる。学習者にもおそらくそのような意識があるのではなかろうか。五十四帖の大まかなあらすじを覚えこみ、教材文で文法の学習をする。また、「源氏物語」は、敬語を学習するための格好の教材になってしまっている、と言ってよいかもしれない。

本書は、そのような学習指導のイメージとは全く異なり、一つの文学作品として「源氏物語」を読む実践が新鮮に感じられた。「源氏物語」に大学在学中から深く関わってきた著者の、二十余年にわたる実践の結実が本書であるともいえる。既に発表されたものも含め、四部十一章の実践記録・研究論文から成る。

構成は、以下の通りである。

第一部　「源氏物語」の学習指導の実際

第二部　「源氏物語」教材化の実態分析と教材研究

第三部　「源氏物語」における語句・文法の研究と指導

第四部　クラブ活動における「源氏物語」の読書指導

第一部では、著者独自の観点により教材化された四つの実践（「明石の上物語」・「明石の上物語」と「浮舟物語」・「桐壺」・「宇治十帖物語」）の記録であり、いずれも学習形態や教材の扱い方、学習者の反応まで詳細に書かれている。注目すべきは、それぞれの目的に従った教材化は、著者による「源氏物語」の再構成になっている点である。第二部では、古典Ⅱ教科書中の「源氏物語」教材化の実態と、氏の授業を支える教材分析の方法が具体的に紹介される。第三部には、敬語表現の研究、語句・語彙（形容詞・形容動詞）、文法（語・文・段落・文章に着目）指導の実際が取りあげられている。より深く、古文を読み味わうための文法指導が目指されており、授業の中での位置づけが明らかになる。第四部は「古典を読む会」のクラブ活動として行われた、昭和三十八年からの指導記録であり、教室における「源氏物語」の学習の原案となったものも含まれている。全章を通じて、用いられた学習のてびき、テキストの様相、学習者の反応、をも適宜取り入れて説明がなされており、授業の組織・経過が立体的に伝わってくる。

『源氏物語』は、高校で学ぶ古典の最後の作品として終着点となるのではなく、そこから新たに学習者が問題意識を見つけ、自身のこれからの学習の糧になる、そういった出発点ともなり得る。氏は常に、生涯教育の視点に立ち、古典指導を考えておられるようである。また、今さらながらに『源氏物語』の奥深さが認識させられ、その学習指導の豊かさ、広がりを感じさせてくれる一冊である。

（A5判、四一二ページ、平成元年七月十五日発行、渓水社刊、四、六三五円）

（高橋　由美）